The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	時間認識・時代区分をめぐって
Author(s)	越智, 勇介; 柏, 恭平; 望月, みわ
Citation	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ. 2018, 15, p. 18-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91408
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

時間認識・時代区分をめぐって

越智勇介・柏恭平・望月みわ

はじめに

本稿は、福井憲彦著『歴史学入門』（岩波書店、2006 年）のうち、第 4 章「時間の認識と時代区分」の内容について検討する。そして、歴史学の入門書として時間認識、時代区分を論じる際、どのような可能性が考え得るか提示することを目的とする。

（1）福井憲彦「時間の認識と時代区分」要約

まず、福井憲彦の論考の簡単な要約から行いたい。福井は、「時間の認識と時代区分」を 3 節に分けて論じる。1・2 節は時間認識、3 節は時代区分というように内容を分けることができる。1 節では、時間認識の変化の画期を時計の出現に置き、その前後の社会を対比して捉える。福井によれば、時計出現以前の社会では、自然の変化によって時間は知覚されており、それは死生観、信仰などと密接に関係した。これは「円環的な時間の感覚」[1]であった。13 世紀なかばごろのヨーロッパに時計が登場すると、時計が示す時間には特別な意味は与えられず、一定の間隔で時間を測った。これは「等間隔の世俗化した時間」[2]である。

続いて 2 節では、時計と社会秩序との関係を論じる。ここで福井が取り上げる社会秩序とは、人の支配と経済であるといえよう。前者について、時計は商人たちが教会の鐘が示す時間に対し、「世俗的な経済生活の時間」[3]を対置・獲得できる力を持った証であったとする。一方で支配者は、時間の秩序を手にしていることを誇示しようとした。支配と時間は不可分の関係にあったのである。後者については、18 世紀に時計は都市を中心に普及し、時計の尺度にもとづいて経済の効率性が高まるとの指摘がなされる。また、時計の工程は、「機械化にもとづいた生産体制、すなわち産業資本主義の生産体制」[4]が軌道に乗るための条件であった。このように、本節では時計の普及と資本主義体制の関連を指摘している。

産業革命による鉄道の誕生により、時間の統一的な基準が必要となった。結果として 19

---

1 ［福井 2006、42 頁］。
2 ［福井 2006、44 頁］。
3 ［福井 2006、45 頁］。
4 ［福井 2006、47 頁］。

世紀末に、今日のようにイギリスが世界の時間の基準となったのである。福井は、当時のイギリスの世界政治経済の主導性を背景として指摘し、時間と政治秩序の不可分性を強調する。

3 節は、1・2 節と主題が異なり、歴史学研究において時間をどのように捉えるか、すなわち時間の区分方法という問題について述べられている。ここでは、先駆的な指摘としてブローデルの時間の三層区分を取り上げる。三層の時間とは、第一に自然環境に関わるような長期的な時間、第二に社会的な制度、経済の仕組みの変化という変化の少ない時間、第三に出来事など刻一刻と変化する短期的な時間である。ブローデルは従前の歴史学の事件史への偏重を批判し、第一、第二の時間軸を重視した。ブローデル以降、時間の枠組みについて議論がなされるようになった。福井は、歴史家が各々の問題に則して時間の枠組みを設定することの重要性を説いている。そして、従来政治体制、経済構造という限られた側面によってのみ行われてきた時代区分に対して、その自明性に再検討を迫り、本論考は締めくくられている。

（2）福井憲彦「時間認識と時代区分」の特徴

以上の福井の議論は、社会史的理解、方法を多分に用いたものであろう。まず、ヒトの時間認識の画期的変化を、時計という「道具」から検証している。「道具」への着目は、社会史による人々の生活世界への注目が大きく関係している。福井は単に時間の測定、数量化という側面の画期性を指摘するに留まらない。時計の掌握、すなわち時間の管理の政治的意味と資本主義体制確立への影響を明らかにし、時計を近代化の大きな枠組みの中で捉えていると考えられよう。次に、歴史家による時間・時代の区分の方法について、政治体制、経済構造の変化による区分を自明視していない。これは本文中で、「歴史を捉えるにあたって、みずからがどのような問題をどのような時間の幅において考えるのか、意識化」[5]することが肝心であるという指摘に端的に表れている。歴史家の「問い」を解決するのに適切な、多様な時間幅の設定を推奨しているのである。

では、福井の論考を「書き直す」ための手がかりはどこに求められるだろうか。まず 1・2 節に関して、無論時計の時間認識の画期性が絶大であったことは否定し得ない。しかし、時計に則した時間は数ある時間認識のひとつにすぎない。前近代はもちろん、近代以降においても多様な時間認識が存在するのである。福井は、前近代における時間の多様性について若干指摘しているが[6]、時計のみに着目した結果、時間認識の多様性という側面は見えづらくなっている。次に 3 節に関しては、1・2 節に比して分量が非常に少ない。福井が、本論考の中で意図的に時計を中心とした時間認識の変化に重点を置いているのは明らかである。しかし、歴史学の入門書としては、古代・中世・近世・近代という時代区分が、ど

[5] ［福井 2006、50 頁］。
[6] ［福井 2006、42 頁］。

のように展開し、どのような問題を孕んでいるのか、および現在試みられている時代区分の方法とはどのようなものかについては言及するべきであろう。

（3）本稿の課題

以上を踏まえて、本稿の課題は、『歴史学入門』第 4 章の内容に即し以下の 3 点とする。

第一に、時間認識、時代区分論についての研究史を概観する。歴史学界全体の流れと、現在の研究水準では何が問題となっているかを確認する。

第二に、時間認識のあり方と変化を、より多角的に捉える。前述の通り、時計という基準から離れ、時計の出現以外に人々の時間認識を大きく変化させた現象について言及したい。さらに時間認識のあり方に関しては、非西欧地域の「時計のある社会」への移行、あるいは移行しない社会のあり様について検討したい。

第三に、時代区分論について、古代・中世・近世・近代という四時代区分について検討する。この四時代区分については、近年新しい方向性を見せている。本稿では、この中でもとりわけ議論が盛んな「近世」という時代区分を取り上げ、その意味を考えたい。

以上を通して、日本史・東洋史・西洋史各分野における最新の研究を取り入れ、時間認識の多様性を強調し、時代区分の持つ意味の変化を意識しつつ、現在の歴史学会における時間認識や時代区分のあり方を論じる。

第 1 章　時間認識・時代区分をめぐる研究状況

本章では、時間認識と時代区分をめぐり、どのような研究が展開されてきたのかを、日本の歴史学界に関して述べる。「時間認識と時代区分」というタイトルを福井は掲げるが、ここで、歴史学におけるこのふたつの用語について確認しておきたい。時間認識とは、過去の人々が、彼らが生きた時間をどう認識していたかということである。すなわち、時間認識は歴史学の研究対象となる。一方時代区分とは、過去を研究する我々が、歴史的な過去の時間をどう区切るかということである。過去を区分する作業は、それ自体非常に難しい作業であるが、多くの歴史学研究者は、時間を区分することに自らの歴史像や研究上の立場を反映させている。よって時代区分は、歴史を研究する際の方法と言える。

以上のように時間認識と時代区分には明確な違いがあるので、本章でも区別して研究史の整理を行う。しかし、歴史研究者の時間認識が、時代区分に影響することは明らかであろう。そこでまず、歴史学界における時間の捉え方、時間認識の変化について論じたい。

（1）支配的であった時間感覚

岸本美緒は、かつて研究者の間に共有されていた時間に関する基本的な了解を、以下の 4 点に整理する。①過去から未来に続く直線的で一回起的な時の流れがある、②そのなかで人類社会はよりよい方向へ「進歩」している、③「進歩」の指標はおおむねヨーロッパ

モデルであり、④「進歩」は「区分」可能な質的構造の断絶を伴う転化である[7]、というものである。ここでは、時間が直線的な流れとして捉えられていること、時間の流れはある基準の「進歩」の営みとしての意味をもっていることが注目できる。

このような認識の背景には、マルクス主義歴史学の存在がある。マルクス主義歴史学において重要であるのは、唯物史観である。唯物史観では、歴史には一定の方向性があると考え、経済・政治・社会といった諸関係の構造の在り方とその変化を、社会の進歩という視角から明らかにしようとした。そして、その構造の変化や次の段階への移行は、生産形態すなわち経済の仕組みによって規定されるとした。「下部構造が上部構造を決定する」という前提があったのである。マルクス主義歴史学ではこのような進歩的な史観のもと、原始共産制から出発し、未来の共産制を到達点とする発展段階論をとった。

マルクス主義歴史学の影響下における時代区分論では、発展段階的な歴史認識を共有したうえで、どの時代がどの段階に相当するのかを論じた。つまり、古代・中世・近世・近代といった時代区分は、社会発展のある段階として、明確な意味を持って考えられていたのである。このような考え方においては、時代を「正しく」区分することが歴史学の目標であった側面もあろう。

（2）進歩的時間認識の転換と社会史

マルクス主義歴史学は戦後歴史学において支配的な影響力を持っていたが、それに対する懐疑が生まれる。すなわち、ヨーロッパモデルをアジアや他の地域に適用できるのか、発展段階的な図式をもって歴史を語るのは適切なのかという疑問である。マルクス主義歴史学の影響力は低下していき、一方でマルクス主義、戦後歴史学への批判として、社会史が日本でも注目される。

1970 年代に入って、高度経済成長が到達点を迎える一方で、公害など経済発展の矛盾が表出した。この中で西欧的「近代」を基準として戦後社会の発展方向を考える近代主義的理解が批判された。日本における社会史の代表的な歴史家は、二宮宏之である。二宮は社会史における座標軸の転換として、①普遍性からローカル・ノリッジへ、②抽象的概念世界から日常的生活世界へ、③ヨーロッパ近代モデルの相対化へ、という 3 点を挙げている[8]。二宮は生活世界の具体的内容として「からだ」、「こころ」を提起し、これらから社会の隠れた構造や権力のしくみを導きだすことが可能であるとした[9]。重要なのは歴史家の「問い」であり[10]、歴史学の対象は拡大していった。また遅塚忠躬は社会史の特徴として 3 点挙げているが、その第一が、「めまぐるしく動く表層」に対し「歴史のなかでゆっくりと動

[7] ［岸本 2002、74 頁］。
[8] ［二宮 2000、134 頁］。
[9] ［二宮 2000、134－135 頁］。
[10] ［二宮 2011］。

く（長期的に持続する）中間層」[11]への着目である。このような社会史の特徴を代表するのは、福井も論じているブローデルの研究である。

時間認識、時代区分において、社会史の直接的な成果であるブローデルの仕事は、福井の指摘するように、長期的な時間に着目したことであろう。しかし時間認識に関して言えば、それだけに留まらない。ブローデルは著書で、「いろいろな構造があり、また変動局面もいろいろであり、こうした構造や変動局面の持続も変化する。歴史学は、ある時間的な「段階」から他の「段階」へと垂直に、多様な説明を受け入れ、発見する。そして各段階には、水平の関係や相関関係も存在する。」と述べる[12]。すなわち、構造の時間的な変化や持続には様々な方向性があり、それらの間で様々な関係性が存在するのである。岸本は、ブローデルの成果について、①時間の観念から定向的発展の要素を排除したこと、②三層の時間を相対的に切り離してその間の関係の考察を可能にしたこと、の 2 点を指摘している[13]。以上のようなブローデルの議論を踏まえれば、マルクス主義歴史学における、歴史がある一定方向の発展に向かっているという考え方及び、「下部構造が上部構造を決定する」というような一方通行な構造の捉え方は見直されるようになるのである。

以上のようなマルクス主義歴史学の後退と社会史の台頭による影響として、①問題関心、研究対象の拡大、②時間の感覚と過去の時間の流れに対する見方の変更、という 2 点を指摘しておきたい。以下では、これが時間認識、時代区分論にどのような影響を与えたのかを見ていく。

（3）時間認識に関する研究

社会史の台頭によって、歴史学の研究対象、関心の幅が拡大したことは既に述べた。この中で、過去の人々が「とき」をどう捉えていたか、つまり時間認識も研究対象として取り上げられることになる。福井も冒頭で述べているように[14]、今日の私たちが当然のように持っている時計を中心とした時間の感覚は、いついかなる時代にどの地域でも一般的だったわけではない。この認識のもと、時計に代表される近代的な時間は相対化されていく。結果として、各時代、地域、職業身分における時間認識が問題化された。時間認識の多様化が強調されたのである。

従来「呪術的」と評価されていた時間認識にも目が向けられる。思想、宗教の影響を受けた時間認識は世界各地に存在する。それらを「呪術的」として歴史学の対象から除外せず、むしろそのような時間認識に注目することで、人間の実際の営みや精神世界が明らかとなった。一方で「科学的な」時間の認識、すなわち時計による時間の認識も完全に人為性を排除したものではなく、支配や政治権力と不可分であったことは、福井の論からも明

---

11 ［遅塚 2010、40－41 頁］。
12 ［ブローデル、浜名訳 1991、28 頁］。
13 ［岸本 2002、77 頁］。
14 ［福井 2006、41 頁］。

瞭である[15]。佐藤次高・福井憲彦による「「とき」の知覚と認識はじつに豊かな多様性をもってきたということである。それは、人がもつイマジネイションの幅の広さを示しているともいえる。どれが迷信的だとか、どれが科学的だとかいって裁断しないほうがよい。」という指摘[16]は、従来の歴史学における時間認識の問題点と、今後の時間認識研究の方向性を明確に提示している。

時間認識は、日本史・東洋史・西洋史の各分野において、様々な時代・地域を対象に、その多様性が指摘され、近代的な時間は相対化されていった。そして、歴史学において時間の認識の仕方をみることは、過去の人々の営みや思想と密接に関わっていることが明らかとなった。逆に近代的な数的に計られる時間であっても、権力に取り込まれる側面があったのである。

（4）時代区分論

多様な時間認識があることが理解されるならば、発展段階論的な史観のみですべての歴史を語ることができないのは明白であろう。単一の座標軸による時代区分は不可能となり、あらためて「時代区分とは何か」を考える必要が生じることになった。岸本は、時代区分とは、「歴史的時間を区分けし、意味づける方法」としている[17]。人が過去の時間の流れを把握し、歴史を描く際、時間を区分することは不可欠である。しかしその方法としては、対象とする地域、問題設定によって変わり得る。研究者の問題解決にとって有効な、多様な時間軸の設定が必要となるのである。「正しい時代区分」という観念は危険であると言える。

時代区分論におけるふたつの動向について述べておきたい。第一に、「古代」「中世」「近世」「近代」の 4 時代区分あるいは「近世」を除いた 3 時代区分についてである。時代区分と言うと、このような区分に思い至ることが多いであろう。ただし現在は、発展段階に即してこれらの用語に明確な意味を持たせることは為されなくなっている。これらの用語が用いられなくなったわけではないが、それは一定期間のまとまりを表す便宜的な用語として使用されるようになったのである。すなわち、世界の各地域における時代区分の内容が統一されている必要はないのである。今日一定の時代を区切る単位として、無概念な用語が使用されることがある。典型的な例が、「世紀」による時代区分である。時代区分論を発展的な史観から乖離させることで、数字による無概念な単位で時代区分が試みられている。例えば、19 世紀における東アジアの経済を、西欧からの衝撃という断絶ではなく、16 世紀から 18 世紀以来存在する商業的・企業家的伝統が 19 世紀においても継続したという側面が評価されているが、このような問題設定から「長期の 19 世紀」という概念が提起されて

---

15 ［福井 2006、45－48 頁］。
16 ［佐藤・福井 1999、17 頁］。
17 ［岸本 1998、15 頁］。

いる[18]。

第二に、時代区分を行う枠組みの変化である。以前の時代区分論では、多くが一国史的な枠組みで時代を区分していた[19]。その後、ある発展段階に各国がいつ到達しているか、などを議論することは有効性を失っていった。そこで一国史的な枠組みを超えた交流・衝突と国内の動向の双方が[20]、各地域、国に社会変動を及ぼした要因として多角的に議論されるに至った。

第 2 章　時間認識を作り出す意図・影響

本章では、「時間認識と時代区分」のうち 1・2 節の内容に即して、時間認識の問題を取り上げる。第一に、人びとの時間認識に関わる道具・制度として暦の問題を取り上げたい。福井は、意図的に時計の出現の重要性を強調している。時計は、近代化の担い手であったことを考えれば、確かに重要である。一方で、福井も「自然のリズムに照応しながらも、一定の量として時間を測定しようとする欲望は、かなり古くから世界各地で認められる」[21]としている。暦の受容、作成はその具体的な試みのひとつである。

第二に、機械仕掛けの時計の出現による時間認識の変容は、実際にどのようにして人びとに浸透していったのか、という問題について若干言及をしたい。福井は、時計による時間認識が「経済的な効率性を測定する基本的尺度」となったとする[22]。近代化の過程において、時計により時間認識が変容した意味を考える手立てとして、それが浸透した／浸透させられるに至った経緯をさらに注意深く見ていく必要があるように思われる。今回は主に日本の事例を検討しつつ、考えてみたい。

(1) 暦の持つ意味

福井は暦（カレンダー）について、「世界各地にある歴史的な暦が示しているように、このような円環的な時間の感覚は、自然における生死の反復の照応や、天空の動きと生命活動との呼応といった、しばしば呪術的とか魔術的とかいわれるような、人間と世界の捉え方とも密接に関係していた。日本の八百万の神々の世界を想起してもらえば、わかりやす

---

18 ［籠谷・脇村 2009］。

19 一国史に収斂される傾向は、マルクス主義歴史学の影響のひとつである。

20 荒野泰典・石井正敏・村井章介は、東アジア世界における時期区分を考える際、対外的インパクトを大きく受けた時期と比較的それが弱かった時期によって区分し、「双方が交互にあらわれる脈動」として東アジアの歴史を評価している。［荒野・石井・村井 1992］また、岸本は、外部との接触による再編成を「共通のリズム」とし、時代区分の基礎たり得るとする。［岸本 2012］これらの議論からは、時代区分を「発展」・「進歩」として捉える認識から変化していることが見て取れる。

21 ［福井 2006、42 頁］。

22 ［福井 2006、47 頁］。

いであろう」[23]としている。暦はある一定の周期、すなわち「円環的な時間の感覚」によって作成されるものであり、その節目ごとに行なわれる祭事（日本におけるお正月、お盆、秋祭りなど）と切っても切り離せない性格からは、「呪術的とか魔術的とかいわれるような」性格を容易に見出せるだろう。ただし、あくまでもそれは暦の持つ意味の一側面に過ぎない。時計の刻む時間が人類の長い歴史のなかで自明のものでは決して無いように、暦もまた、王権、宗教その他の権力によってつくられていく性格を有している。

何月何日であるかを定める根拠となるのは天文学的観測である。原初的な暦法（自然暦）においては、主に農業に関するいろいろな労働の始まる時候に、新たな「月」が始まっていたらしい。すなわち、「月」が更新される日は年によって異なっており、その幅も当然バラバラであったのである。さらに言えば、農閑期に「月」の概念を導入する必要はなかったため、その暦は円環性をそもそも持ち合わせていなかった[24]。かかる存在と、天文学的観測に基づく、円環的な暦とのあいだに広がる懸隔は大きい。もちろん「頒暦」される暦にもそのような農事・祭事との結びつきは強く残されるのであるが、そこには自然暦にはないもの、すなわち、それを用いる人間集団が「今日は何月何日である」という意識を共有するという、社会統合の役割が付加されている。自然暦の使用が今なお根強いアフリカサバンナ地帯の諸民族を考察した川田順造は、当該地域をフィールドとして、自然暦とイスラームのもたらしたヒジュラ暦とが重層化し、互いに混ざりきっていない「未分化の時空」の様相を描き出している[25]。

自然暦に則った暮らしが行なわれていたであろう列島の暮らしに「頒暦」の体系を持ち込んだのは、古代国家であった。その意図するところは、社会統合にあった。日本における暦の受容は、飛鳥石神遺跡出土木簡の存在から少なくとも 7 世紀後半に遡ることが認められており、中国→朝鮮半島→日本という流入経路が想定される。そしてその性格について、鐘江宏之は「暦の技術とは、まさに支配体制に管理されたものであり、自由に伝播していくものではなかった。新しい暦法への切り替えには、なんらかの政治的な契機による強力な意図が必要とされたのである。これらの点からみて、暦を使うようになったことじたいも、古代国家による支配確立のひとつの指標であったということもできる」[26]と指摘している。日本が造暦の模範とした中国において、暦を頒布すること、すなわち「頒暦」は皇帝権力に属し、したがって今日が何月何日であるかということを決定しうるのは皇帝ただ一人であった。日本においては天皇権力がこれを担うこととなった。時計の刻む時間と同じく、暦にも支配の論理との深い関係性があることが明白である。

ここに、王権の政治・祭事は暦に則って行なわれるようになり、すなわち、官人や王権によって祀られる「八百万の神々」は暦のリズムに束縛されることになったのである。もっとも、先のアフリカの例と同様に、暦の導入によってただちに暮らしの全てがそれの影

---

23 ［福井 2006、42 頁］。
24 ［岡田・松井 2006、5-6 頁］。
25 ［川田 1999、132-133 頁］。
26 ［鐘江 2008、38 頁］。

響下に入るわけではない。三宅和朗は『風土記』の検討などを通じて、「刻まれた時間」とは異なる、人間の五感によって感得される時間、すなわち「感じられる時間」が古代日本社会になお存続したことを明らかにしている[27]が、その両者の存続する様相は、まさしく川田の言う「未分化の時空」そのものであろう。

以上、本節では、暦を素材として、時計以外の道具によって人びとの時間認識が変容を来されていく事例を検討してきた。それは機械仕掛けの時計がもたらすそれに先駆けて起こり、人びとはここに初めて「刻まれる時間」の束縛を受けることになったのである。

（2）時計による時間認識の浸透

機械仕掛けの時計がまず西ヨーロッパ世界に出現し、それが当該地域での産業資本主義の発展の一要因となったことは、福井が言及するところである。しかし、福井の議論は西欧のみを対象としている。本節では、非西欧世界における事例の考察を通して時計による時間認識の浸透の具体的様相を検討し、時計の出現以後を生きる私たちの時間認識についても考えてみたい。

福井は『時間と習俗の社会史』において以下のように述べている。

> 時代的にみればほぼ鉄道の建設と並行して進む工場労働の組織化が、それ（引用者註：時間を守ることが厳しく求められる「場」）にあたる。おなじくそれらと並行して、さらにはそれらに先だってあらわれた領域が、教育の場や、あるいは軍隊とか監獄といった、より直接に人びとをしつけ、教えみちびこうとする場であった。ミシェル· フーコー風にいうとするなら、近代社会にふさわしい人間をつくりだし、調教を実現するひとつの重要な鍵として、正確に秩序立てられた時間の厳守ということがかかげられたのだ、となるだろう。正確な時間の秩序が人びとの心に内在化されるようにすることで、秩序の時間が社会をつらぬくことがめざされたのだ、と。つまり時計が社会支配の明確なシンボル、権力のシンボルとして人びとの目にあまりにもあらわであるとすれば、そのシンボルは一種の直接的な記号のごときものであるから、支配の効率はさほど高くはない。しかし時計の時間が人びとの生活のなかに組みこまれ、またその時間秩序を守ることを人びとが自明のこととして内発的に担うようになるとすれば、秩序はより効率よく社会体内をつらぬくことになり、時間を統御する権力の存在じたいが目にみえないものとされてゆくであろう[28]。

すなわち、機械仕掛けの時計は、単に技術の発展によって自然に社会に浸透したわけではなく、支配の方法として国家、また資本家によって意図的に導入され、その結果として

---

[27] ［三宅 2010、165-176 頁］。
[28] ［福井 1996、40-41 頁］。

普及したものであった。かかる時間認識が私たちの生活に浸透していることは、ある意味で恐ろしいと言えるが、時計の刻む時間に厳しく従って生活を送ることは、人間にとって本来的に「自明のこと」ではないのである。

一方、角山栄は、メキシコやインドの事例から、時間による労働者の組織化が必ずしも世界中のあまねく社会でうまくいったわけではなかったことを描写している[29]。日本においても、「等間隔の世俗化した時間」は明治時代までほとんど存在しなかった。明治の日本人は、教育・軍隊・工場などにおいて機械仕掛けの時計の刻む時間認識に出会い[30]、そしてそれに管理されることをやがてふつうのことと感じるようになっていった。

ここで、時間による労働者の組織化がうまくいかなったメキシコやインドの労働者が、決して仕事をしないいい加減な人びとではなかったことを確認せねばならない。時間通りに来ない、にわかに仕事を休むといった行為は、時計の刻む絶対的な時間認識にまったく染まってしまった私たちからすると確かに良くは思えない。しかしながら、よい仕事をすることと、時間を細かく守ることは本来別物である。有馬学は、「時間さえくれれば、金になるんだから。昼間がんばってしまえば昼間の給料だけなんだけれど、夜まで仕事残せば残業になって二割五分増しとかね」という聞き取りによる職人的板金工からの証言[31]を引きつつ、「彼は、戦時期に徴用工制度ができてから、工場というものが駄目になったという。徴用工制度は、労働についての意識を変えてしまったのだ。この、何をどう作ったかが金になるのではなく、＜時間で賃金を得る＞ことを当然とする意識こそは、戦後的な私益意識の成立と見ることができるだろう」[32]と述べる。

ここに、機械仕掛けの時計の刻む時間認識を最大限に受容した日本社会の特質は、ほとんど言い表されていると言ってよい。そして日本人は、その時間認識を至高のものと捉え、「感じられる時間」の感覚がより強く残る南島の人びとの時間認識を「沖縄時間」と呼称して、その社会的な後進性を論じてやまなかったのである。時計の刻む時間認識の受容度をもってそれを安易に近代化の指標とするこのような考えは日本社会に広範に見られ、後進地域と看做された南島社会においてもそれは受け入れられていった。かかる理解は、沖縄本島と八重山、石垣島と波照間島というよりマクロな中心－周辺関係を語る際に今なお持ち出され続けていると、民俗学者の鈴木正崇は指摘している[33]。元々は管理の行ないやすい近代的な人間をつくり上げるために導入された時計の刻む時間認識は、軍隊や労働の空間のなかに深く浸透していったのみならず、自らの属する社会集団の進取性をあらわすものとして、むしろ自覚的に人びとの受容するところとなったのである。もちろん、時計が社会の優劣を定める道具では決してないにもかかわらず。

機械仕掛けの時計が刻む時間は、社会に秩序をもたらし、また産業資本主義の発達を実

---

29 ［角山 1984、26-29 頁］。
30 ［鈴木淳 2001、99-107 頁］。
31 ［森 1981、64 頁］。
32 ［有馬 2010、363-364 頁］。
33 ［鈴木正崇 2004、538-540 頁］。

現した。しかしながら、私たちをたった今も支配し続けるその時間認識は、決して唯一絶対のものではあり得ないし、それは今後も変わることはない。その意味で、私たちの時間認識は常に単一ではなく、世界は「未分化の時空」であり続けるのである。

第 3 章　世界史の「近世」を考える

（1）近世をめぐって

第 1 章で述べたように、戦後日本の歴史学における時代区分はマルクス主義歴史学において発展段階論に基づく一国史観にとどまっていた。しかし国の枠組みにとらわれないグローバルな歴史を考えることの必要性が高まっている。本章ではこのような視点から、世界的な共時性を視野に入れた近世という時代区分を取り上げる。1990 年代以降のグローバル・ヒストリーの隆盛も相まって、現代の歴史学においても、各地域史及び世界史全体に「近世」という時代区分を設定することは、現在の歴史学界では世界的に支持される時代認識となってきている。例えば、『歴史学研究』第 821・822 号で「「近世化」を考える」と題した特集が組まれ、16 世紀から 18 世紀を中心とした時期を「近世」と捉えて、この時期の世界各地[34]における秩序形成の在り方を考える試みがなされている[35]。以下では、ヨーロッパ史・アジア史において、「近世」という時代区分がどのように認識されたのかを概観し、そのうえで社会と、その外部世界との関係から、「近世」を考えることで近世世界史像を構築する試みを行う。そのために、まず『岩波講座世界歴史』を取りあげ、世界史の時代区分がどのように変化してきたのかをたどる。

『岩波講座世界歴史』は、1969 年から 1971 年にかけて刊行された旧版と 1997 年から 2000 年にかけて刊行された新版の 2 種類が存在する。旧版の構成を見てみると、全巻を時代別に区別しており、古代、中世、近代、現代の 4 つに区分されている。旧版では、古代を「世界の諸地域において独自の文明が生まれ、それが国家の形成となり、さらにその文明圏を領域とする統一国家が形成される時期」、中世を「統一国家の変質ないしは解体の結果、新たな独自の諸地域世界の並存が生じ、これらが近代以後の一体的な世界形成の前提条件を醸成する時期」、近代を「世界史的関連の成立している時期」と規定している[36]。旧版では「近世」という区分は見られない。近代篇では、16 世紀以降のヨーロッパ・アメリカを近代としている。しかし一方で、14 世紀から 19 世紀の半ばまでの東アジアは中世篇に属している。つまり、16 世紀以降ヨーロッパが近代に突入しているのに、アジア地域はいまだに中世にあるという事態が生じていた。また旧版では「世界史」の意味が前近代と近代で異なり、前近代では相互に併存する地域世界史を「世界史」と捉えていた。これに

---

[34] 具体的には、日本・ドイツ・イタリア・エジプト・中国・朝鮮・インドなど地域を問わず、様々な地域をカバーしている。
[35] ［岸本 2017、5 頁］。
[36] ［岡崎 2002、96 頁］。

対し、人類社会全体を含む地球世界史は 16 世紀から 17 世紀にかけて、近代になって初めて成立するとの認識に立脚していることが特徴である。

これに対し新版は「個別性と共時性」を基本視点とし、普遍的法則が否定されている。時代区分に関しても、旧版に見られた古代、中世、近代、現代といった区分は、各巻の標題には採用していないとしている[37]。ただし、時代区分を全く廃したというわけではなく、個別の論考では各筆者の見解に基づき使用されている。このように新版で時代区分を表面に出さなくなった背景には、歴史学者の、時代区分への認識の変化がある。1980 年代以降社会構成体の発展段階論に対する歴史学界の支持が失われたことで、時代区分の前提をなす枠組みが崩壊してしまったのである。このような歴史学の大きな転換が、新版から時代区分がなくなった理由である。加えて上述の通り、旧版ではヨーロッパ史とアジア史で時代区分にずれが生じていた。このことが、ヨーロッパ史に比べてアジアが社会発展において停滞的であるとの認識を与えてしまう恐れがある。この不整合を正すことが時代区分を廃すもうひとつの理由である。しかしだからといって、新版が歴史の区切り自体を否定したのではなく、岸本美緒も意図的に時代区分を排しても、ふたつの自然な切れ目が存在するとして、3 世紀から 4 世紀の東アジアとヨーロッパに共通する切れ目と全世界的に見られる 16 世紀の切れ目の存在を指摘する。この 16 世紀の切れ目こそが「近世」であると考えられる。

（2）ヨーロッパの近世

西洋史においては長らく古代、中世、近代の三時代による時代区分が主流であった。その起源は、ルネサンス期の人文学者の時代感覚にさかのぼる。彼らは自らの生きる時代を古典古代文化の再生・復活の時代と捉え、古典古代と自らの生きる時代の中間の時期を古典古代文化の没落、消滅によって特徴づけられる暗黒の中間期と捉えた。このような時代区分が、19 世紀以降マルクス主義の発展段階論と結びつき、古代の奴隷制、中世の封建制、近代の資本主義体制という、世界史の三時代区分として定着してきた。

しかし、近年の西洋史研究において、中世と近代の間の時代として「近世」という時代区分が登場した。従来「近代」と呼ばれてきた時代のうち、とくに 15 世紀末ごろから 18 世紀末に至る約 300 年間は early modern という語を用いて表されるようになった。この時期は、16 世紀に入る前後からヨーロッパが支配する空間がグローバルに拡大することや、宗教改革によってカトリック世界の一体性が失われることに目を向ければ、「中世」と異なる段階にあることは明らかだからである。

しかし、例えばこの時期の国家体制に注目してみると、絶対王政と呼ばれる体制は、中世の封建的国家とは異なるが、我々が近代国家とみなす国家とも毛色が異なる。近代的議会や国民主権を前提とする国家は、市民革命を経験して以降に成立する。

---

[37] ［岸本美緒 1998、9 頁］。

この early modern という時期は、日本においては「初期近代」とも「近世」とも訳されてきたが、上述の新版『岩波講座世界歴史』の第 16 巻「主権国家と啓蒙」の「はしがき」を執筆した近藤和彦は、「初期近代」でなく「近世」を選択している。なぜならば、「初期近代」としてこの時代を表すと、early modern はヨーロッパを中心とした世界の再編成という「固有の近代」に先行し、それに連続する移行期という性格が強く押し出され、近代の前提とみなされ得るからであるという。しかし、この時代は中世とも 19 世紀以降の近代とも異なる性質を持ち、ヨーロッパ社会がダイナミックに変化し拡大しつつひとつのサイクルをなした時代であり、近藤は「近世」という訳語を自覚的に用いている[38]。

さらに近藤は、「近世」という時代はヨーロッパ固有のものではなく、世界の「構造化」のサイクルのなかで、世界史的にひとつのまとまりを持つ時代であると述べる[39]。このサイクルにはふたつのサイクルが存在し、第一サイクルは 16 世紀から 18 世紀を指し、第二サイクルは 19 世紀以降を指す。近藤は前者を「近世」、後者を「固有の近代」として用いる。「近世」の概念が西洋史の側から拡張され、世界史上のひとつの時代として主張されているのである。

（3）アジアの近世

次に中国史研究に目を向けよう。内藤湖南は『支那論』（1914 年）において、宋代以降すなわち 10 世紀以降の時代を指して「近世」を定義した。内藤は中国社会の内部変化に目を向け、唐宋変革期を中世から近世への移行期と考えている。そして宋代以降清末までの社会がヨーロッパのルネサンス時代に見られるような君主独裁政治、庶民の台頭、新文化の勃興といった変化がこの時期に起こったとする[40]。内藤は後にこの「近世」を「近代」と置き換えている。

内藤の学説を継承・発展させたのが宮崎市定である。宮崎は世界史的な観点から、ルネサンス以降を「近代」とみなす西洋史学の時代区分を、中国史の時代区分に適応させた。宮崎は宋代以降の中国社会の発展を西洋のルネサンスに先行する「近世史的発展」とであると論じた。宮崎は、内藤から継承した「近世」概念を世界史的な普遍性を持つものとして拡張したが、両者はともに、中国の歴史がヨーロッパの歴史と同様の発展コースをたどるという考え方を前提としている[41]。

これに対して、渡辺信一郎は「近世」の開始時期をメキシコ銀の流入によって中国が最初に世界経済にリンクし、商業的農業と国内的な市場が萌芽し始めた 16 世紀に見られる

---

38 ［近藤和彦 1999］。
39 ［近藤和彦 1999］。
40 このような宋代以降を「近世」とする内藤の時代区分は、唐宋変革を古代から中世への転換とみなす反対論の存在により、定説とはならなかった。
41 ［永井 2007、521-531 頁］。

と述べている[42]。一方、岸本美緒は、東アジアにおける近世を 16 世紀から 18 世紀までの間を指すものとして用いている。これはこの時代に様々な地域が相互に影響を与えながら、激動のリズムを共有してきたという認識に基づいており、16 世紀の急激な商品経済の活発化、社会の流動化の中で新しい国家が生まれ、17 世紀から 18 世紀に新しい秩序が作られていくひとつのサイクルが見えてくると述べている[43]。これらの論は、中国史の「近世」を外界との接触という観点から捉えようとしている。

東南アジア史においても、東南アジア海洋世界の動向を描き出したアンソニー・リードが、15 世紀から 18 世紀（より狭くすれば 16 世紀から 17 世紀）の東南アジアに「近世」概念を適用し得るとする。その特徴として、商業の活発化、新たな軍事技術、新たな集権国家の形成などを挙げている。同じく『岩波講座東南アジア史』においても、15 世紀から 18 世紀は東南アジア史の「近世」と位置づけられており、東南アジアはリードの研究に由来する「交易の時代」と呼ばれる時代を経験し、東南アジアが国際交易の中心として繁栄した時期であったとする[44]。

また、新版『岩波講座世界歴史』においても、アジア史における 16 世紀から 18 世紀の時代は、交易の急激な活発化、社会の流動化によって開幕し、ヨーロッパの本格的進出に伴い幕を閉じる一サイクルの動きを持つ、それ以前ともそれ以降とも異なる固有の時代とみなされている。

西洋史学のように「近世」という語が明示されているわけではないが、ここでは実質的に「近世」に相当する時代区分が導入されていると捉えることができる。そしてそれはヨーロッパ世界との結びつきを意識した時代区分なのであり、このような視点に立つのであれば、外部世界とのつながり（とりわけヨーロッパとアジア）という観点から世界史における「近世」の始まりを考えることが可能なのではないだろうか。

（4）世界史の近世

永井和は、上原専禄に由来する「世界構造転換論」とイマニュエル・ウォーラーステインの「近代世界システム論」から時代区分を考察している[45]。永井は歴史の過程において、世界構造が、地球上に地中海世界、古代オリエント世界、中世ヨーロッパ世界、イスラム世界、東アジア世界などの多くの世界が存在する「多世界の併存」から現在のような「単一の世界」へと転換してきたことに着目し、この変化が急速に進む時代を世界史的な意味での「近代」と捉えることが可能であると考える。マゼラン艦隊による世界一周航海により、近代以前の諸世界が海路によってひとつに結び付けられる道が開かれたことを考えると、この構造転換の始まりは 16 世紀と考えるのが妥当である。そしてその終わりは「近代

---

42 ［岡崎 2002、100-101 頁］。
43 ［岸本 1998、4 頁］。
44 ［永井 2016、90 頁］。
45 近代世界システム論に関しては［山下範久 2008、77-99 頁］。

帝国主義による地球の分割」が完了する 19 世紀末に位置づける。この構造転換をもたらした直接的で持続的な「力」こそが、イマニュエル・ウォーラーステインが提唱する「近代世界システム」の生成・拡大・膨張の運動である。つまり、「近代世界システム」が他の世界を解体し、包摂し、それらが「近代世界システム」の内部に繰り入れられることによって、それらの世界がそれ以前に有していた自立性が失われ、単一の世界が形成されていった。そしてこの単一の世界に組み込まれることが、近代に入ることを意味する[46]。

しかし、この区分にはいくつかの問題点がある。この時代区分は、16 世紀から 19 世紀末までの世界史を、連続的で直線的な世界構造の転換の過程として捉えている。この論では、「近代世界システム」の内部に入って初めて「近代」に入るのであるが、ここに矛盾が生じることになる。すなわち、「近代世界システム」における世界構造転換は、16 世紀に西ヨーロッパがラテンアメリカを包摂することによって始まったのであり、ヨーロッパとラテンアメリカは 16 世紀にすでに近代に入っている。しかし、日本は 19 世紀半ばの開国によって、「近代世界システム」に包摂され、中国も同様にアヘン戦争がその契機となる。つまりアジア地域が近代に入るのは、19 世紀になってからであり、ヨーロッパに比べると、300 年の時間差が生じてしまう。

この 300 年間の時間差、つまり、アジア諸地域が「近代世界システム」の外部にとどまっていた時代を永井は「近世」と呼んでいる。永井は世界の一体化を視野に入れてはいるが、「世界システム論」がヨーロッパ中心主義史観として批判を受けているのと同様、ヨーロッパ中心主義史観から脱却できていないのである。

アジアがヨーロッパとの「出会い」を経験するのは、ラテンアメリカ諸国と同様に 16 世紀のことである。しかし、19 世紀に入るまで、アジアがヨーロッパを中心とする「世界システム」に包摂されることはなかった。アジアは経済的にも軍事的にもヨーロッパよりも優位にあり、ヨーロッパ世界がアジア世界を包摂することなど到底不可能だったのである。このようなヨーロッパとアジアの関係を考慮すれば、「近世」という時代がヨーロッパを中心とする世界システムが世界を覆っていく過程でないことは明らかであろう。世界がどのように一体化していくかという視点から、「近世」という時代区分を再考する必要がある。

そのためにまず、「世界システム論」のヨーロッパ中心主義に対する批判をいくつか紹介しておこう。まず、ジャネット＝アブー＝ルゴドは、「13 世紀世界システム論」を提唱した[47]。その趣旨は、モンゴル帝国支配下で、13 世紀から 14 世紀にユーラシアの主要地域を東西に統合する世界交易・交通網が存在し、世界システムとして機能していたというものである。ここにおいてヨーロッパは周辺に過ぎず、16 世紀の近代世界システムはこの後継に過ぎないとルゴドは主張した。

また、アンドレ・G・フランクも同様に世界システム論を批判している[48]。彼は著書『リオリエント』において、1400 年から 1800 年の間にすでに単一の世界システムが形成され

---

[46] ［永井 2007、517-520 頁］。
[47] ［ルゴド、佐藤・高山・三浦・斯波訳 2001］。
[48] ［ルゴフ、山下訳 2000］。

ていたことを指摘し、これを「近世世界システム」と呼んだ。ここにおいて、優越的な地位を占めていたのは中国とインドであり、ヨーロッパは周縁的存在に過ぎなかった。ヨーロッパがアジアに勝るのは 19 世紀に産業革命を経験してからである。5000 年前から単一の世界経済は存在し続け、「近世世界システム」はその連続体のある特定の時期における動態に過ぎず、そしてウォーラーステインの唱えるヨーロッパ中心的な「近代世界システム」は存在しないとする。アジアはこの世界システム内部の中心に位置する存在であった。

ケネス・ポメランツも、この時期におけるヨーロッパの非優位性を説いた[49]。いわゆる「大分岐論」である。彼は 16 世紀から 18 世紀半ばまでの中国の揚子江流域、日本の畿内・関東、西ヨーロッパの三地域は経済発展において、ほぼ同等の水準にあり、いずれの地域も商業的農業とプロト工業に支えられた市場経済の高度な発展が見られたと、比較経済史の方法を用いて主張した。そして、19 世紀に石炭の利用可能性が生まれたことや、アメリカ大陸が巨大な土地・市場を抵抗したことによって、西ヨーロッパのみが工業化を経験することができたと述べている。

以上の議論を踏まえると、16 世紀から 18 世紀の世界において、ヨーロッパが「世界システム」の中心であったわけではなく、アジアがそれに比肩あるいは優越する存在であったことがわかる。そして、ヨーロッパがアジアに対し経済的・軍事的に優位に立つことが可能になったのは、19 世紀以降になってからのことであった。このようなアジアとヨーロッパの関係の変化から「近世」を考えてみるならば、アジアがヨーロッパよりも優位であった時代が世界史的な意味での「近世」であり、それが逆転する 19 世紀以降を「近代」として考えることができるのではないか[50]。

以上、一国史を超えた枠組みからではなく、ヨーロッパとアジアの力関係の変化から時代区分を考えてきた。しかし、もちろんこれが「正しい」時代区分だと主張したいわけではない。岸本が述べるように、時代区分とは「歴史的時間を区分けし、意味づける方法」であり、ここではあくまで時代区分の在り方の一例を提示したにすぎないからである。

おわりに

本稿では、時間認識、時代区分について、近年の研究動向を踏まえて検討を行った。時間認識、時代区分ともにその多様なあり方、方法はもはや広く認められている。時間認識のあり方については、先進や後進と評価する視点は否定されている。むしろそのような時間認識がどのような人間社会の営みの中で発生したかという問題から出発し、その社会における宗教・生活様式・文化や、さらには政治的意図を見出そうとしている。時代区分は研究者の歴史像を表すひとつの手段であり、過去のある一定期間をどう捉えるかという問題に対し、多様な観点から歴史の連続性と断絶性を考える方法として機能している。

---

[49] ［ポメランツ、川北監訳 2015］。
[50] ［永井 2016、91-97 頁］。

それでは、教育現場ではどのように時代区分が行なわれているのだろうか。ここでは最も代表的な教科書として、山川出版社の『詳説世界史 B』と『詳説日本史 B』を例に取り、この点を確認しておこう。なお、現行の教育指導要領に関しては『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』を参照した。

まず、「世界史 B」と「日本史 B」の学習指導要領において、時代区分がどのようになされているのかを確認する。「世界史 B」の内容は、「(1) 世界史への扉」「(2) 諸地域世界の形成」「(3) 諸地域世界の交流と再編」「(4) 諸地域世界の結合と変容」「(5) 地球世界の到来」の 5 項目で構成されている[51]。各地域・各時代の歴史に関しては (2) ～ (5) で理解させることになっており、明示しているわけではないが、(2) が古代、(3) が中世、(4) が近世・近代、(5) が現代と対応していると思われる。

「日本史 B」の内容は、「(1) 原始・古代の日本と東アジア」「(2) 中世の日本と東アジア」「(3) 近世の日本と世界」「(4) 近代日本の形成と世界」「(5) 両世界大戦期の日本と世界」「(6) 現代の日本と世界」の 6 項目から構成されており、(1) ～ (4) ではそれぞれの項目名に時代区分が付されている。また、(5) は近代国家の展開過程と位置づけられている[52]。

次に、『詳説世界史 B』と『詳説日本史 B』の時代区分を確認する。世界史 B では古代・中世・近世・近代といった時代区分は教科書上では見られない。一方各論では中世や近代といった表記が見られる。日本史 B においては 4 区分による時代区分で、教科書が 4 部に分けられている。どちらの区分も学習指導要領での区分に倣ったものであると考えられるが、時代区分がどのようになされているのか、明確ではなく、全国歴史教育研究協議会編の『世界史用語集』と『日本史用語集』においても、「古代」や「中世」といった時代そのものについての説明はなされていない。

以上のように、高等学校教育においては、明確な定義・説明がないままに、教科書で時代区分がなされているという問題がある。さらに、日本史においては、平安や鎌倉といった時代区分と四時代区分が一致していないことも問題である。あるいは「現代」については、第一次世界大戦以降を指すのか、第二次世界大戦以降の世界を指すのか、あるいはソ連の解体以降や 21 世紀に突入してからの時代を言うのか、不明瞭という問題もある。

時代区分とは、歴史のイメージを捉えやすくするためのものであると言えるが、このような状況では、かえって歴史の流れが理解しにくくなってしまうのではないだろうか。どう時代区分を行うかは、どのような時代像・歴史像を教えるかという問題と不可分であり、学術研究のみならず、歴史教育とも連携して考えていくべき問題なのである。

---

[51] ［文部科学省 2010、28 頁］。
[52] ［文部科学省 2010、 64-73 頁］。

参考文献

はじめに

福井憲彦

2006　『歴史学入門』岩波書店。

第 1 章

F.ブローデル・浜名優美訳

1991　『地中海　I　環境の役割』藤原書店。

荒野泰典・石井正敏・村井章介

1992　「時代区分論」同編『アジアのなかの日本 1 アジアと日本』東京大学出版会、1-57 頁。

籠谷直人・脇村孝平編

2009　『帝国とアジア・ネットワーク―長期の 19 世紀』世界思想社。

岸本美緒

1998　「時代区分論」樺山紘一他編『岩波講座世界歴史 1 世界史へのアプローチ』岩波書店、15-36 頁。

2002　「総論　時代区分論の現在」歴史学研究会（編）『第 3 次現代歴史学の成果と課題 I 歴史学における方法的転回』青木書店、74-90 頁。

2017　「地域論・時代区分論の展開」（歴史学研究会（編）『第 4 次現代歴史学の成果と課題 2 世界史像の再構成』積文堂出版、2-16 頁。

佐藤次高・福井憲彦編

1999　『地域の世界史 6 ときの地域史』山川出版社。

遅塚忠躬

2010　『史学概論』東京大学出版会。

二宮宏之

2000　「戦後歴史学と社会史」歴史学研究会（編）『戦後歴史学再考　「国民史」を超えて』青木書店、123-147 頁。

2011　「歴史の作法」同『二宮宏之著作集　I　全体をみる眼と歴史学』岩波書店、109-158 頁。

村井章介

1988　「アジアへの視線」同『アジアのなかの中世日本』校倉書房、11-30 頁。

第 2 章

有馬学

2010　『帝国の昭和』講談社（初出、2002）。

岡田芳朗・松井吉昭
2006　「暦のしくみ」同編『暦を知る事典』東京堂出版、2-46 頁。
鐘江宏之
2008　『全集日本の歴史 第 3 巻　律令国家と万葉びと』小学館。
川田順造
1999　「アフリカ社会の「とき」」佐藤次高・福井憲彦編『ときの地域史』山川出版社、88-133 頁。
鈴木淳
2001　「二つの時刻、三つの労働時間」橋本毅彦・栗山茂久編『遅刻の誕生　近代日本における時間意識の形成』三元社、99-121 頁。
鈴木正崇
2004　「八重山群島における時間認識の諸相」『祭祀と空間のコスモロジー』春秋社、501-540 頁（初出、1979）。
角山栄
1984　『時計の社会史』中央公論社。
福井憲彦
1996　『時間と習俗の社会史』ちくま書房。
三宅和朗
2010　『時間の古代史』吉川弘文館。
森清
1981　『町工場』朝日新聞社。

第 3 章

アンドレ＝G＝ルゴフ・山下範久訳
2000　『リオリエントーアジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店。
岡崎勝世
2002　「各論 1 三区分法の現在」歴史学研究会編『第 3 次現代歴史学の成果と課題 I 歴史学における方法論的転回』青木書店、91-106 頁。
岸本美緒
1998　『世界史リブレット 13 東アジアの「近世」』山川出版社。
1998　「時代区分論」樺山紘一他編『岩波講座世界歴史 1　世界史へのアプローチ』岩波書店、15-36 頁。
2002　「総論　時代区分論の現在」歴史学研究会（編）『第 3 次現代歴史学の成果と課題 I　歴史学における方法的転回』青木書店、74-90 頁。
2017　「地域論・時代区分論の展開」（歴史学研究会（編）『第 4 次現代歴史学の成果と課題 2　世界史像の再構成』積文堂出版、2-16 頁。
木村靖二他編
2017　『詳説世界史 B』山川出版社。

ケネス・ポメランツ・川北稔監訳
2015　『大分岐―中国、ヨーロッパ、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成』名古屋大学出版会。
近藤和彦
1999　「近世ヨーロッパ」樺山紘一他編『岩波講座 世界歴史 16　主権国家と啓蒙』岩波書店、3-80 頁。
1999　「はしがき」樺山紘一他編『岩波講座世界歴史 16 主権国家と啓蒙』岩波書店、v-xi 頁。
笹山晴生他編
2017　『詳説日本史 B』山川出版社
ジャネット＝アブー＝ルゴド・佐藤次高・高山博・三浦徹・斯波義信訳
2001　『ヨーロッパ覇権以前―もう一つの世界システム（上・下)』岩波書店。
全国歴史教育研究協議会
2014　『日本史用語集　A・B 共用』山川出版社
2014　『世界史用語集』山川出版社
永井和
2007　「東アジア史の「近世」問題」夫馬進編『中国東アジア交流外交史』京都大学学術出版会、506-556 頁。
2016　「近世論から見たグローバル・ヒストリー」樺山紘一他編『岩波講座 日本歴史 22　歴史学の現在』岩波書店、75-102 頁。
文部科学省
2010　『高等学校学習指導要領解説』教育出版。
山下範久
2008　「世界システム論からグローバル・ヒストリーへ」水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』山川出版社、77－90 頁。

<u>執筆分担</u>

はじめに：望月

第 1 章：望月

第 2 章：越智

第 3 章：柏

おわりに：柏